

日
暮
廻
史

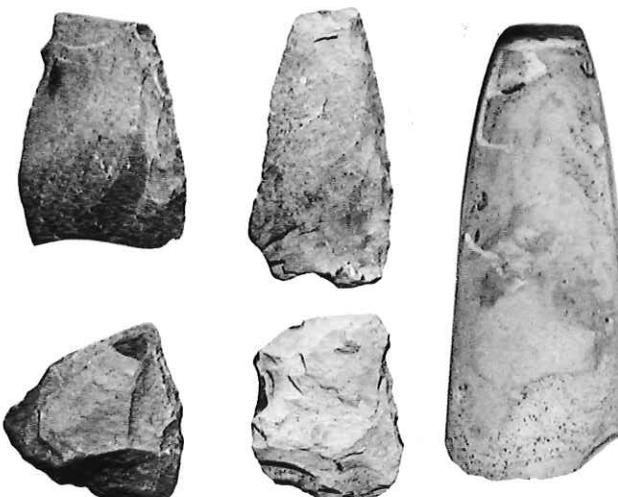
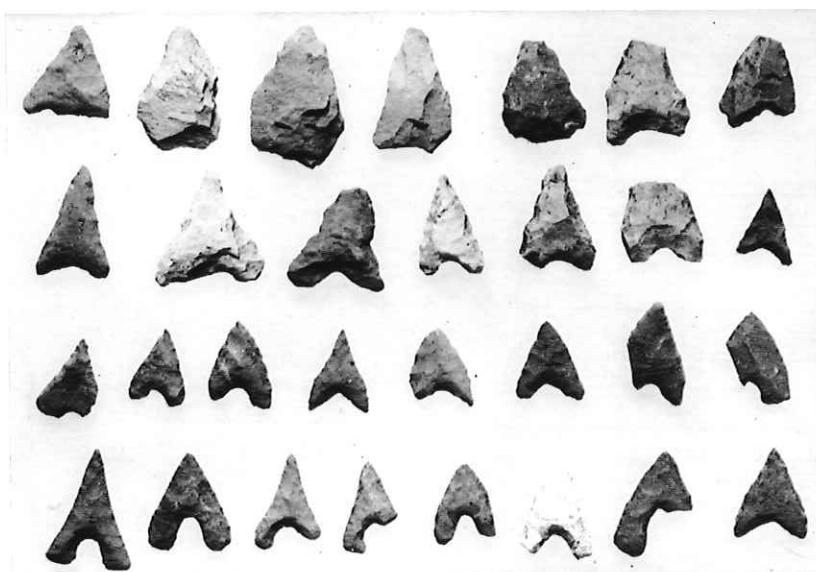
上
卷



重要文化財 但馬倉印（東京都 西脇敬之助蔵）



深鉢形土器（神鍋遺跡出土）



石器〔石鎌・石斧・石刀〕(神鍋遺跡出土)



硯 (水口下山古墳出土)



高杯 (祢布ヶ森東遺跡出土)



銅鏡 (山宮下ノ谷出土)



但馬國分寺塔跡





軒丸瓦(单弁十六葉花文)



軒丸瓦(单弁八葉花文)



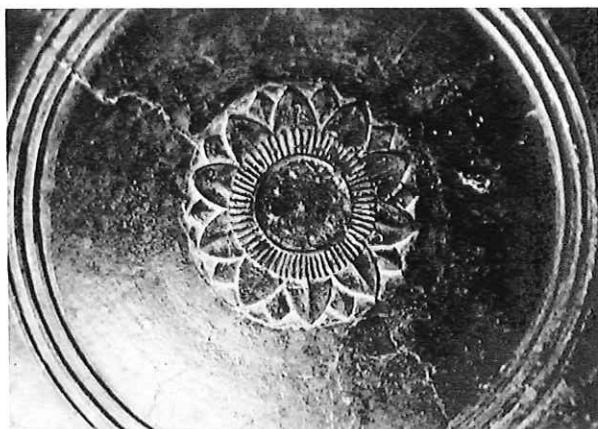
風鐸



軒平瓦(唐草文) (いずれも但馬国分寺跡出土)



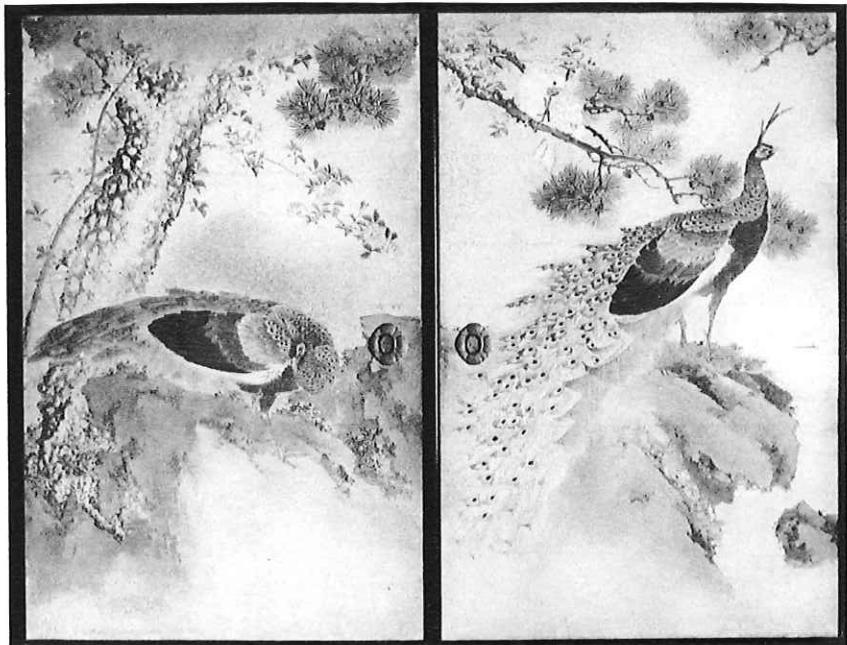
觀音寺仁王門（県指定重要文化財）



進美寺鰐口撞座（県指定重要文化財）



积迦如来坐像（大円寺藏）



孔雀の図 岸連山筆 (町指定文化財・隆国寺蔵)

月主常法親王廳下

但馬國在應宣寺

下早停山達業寺吉祥寺并達屋紙工

保新立寺如元為永代國領絕令并濟羣

右三箇所内蓮臺寺吉祥寺者在麻葉

法門寺代相傳之序跡也而去文承寺中故

聖惠法門教之時懷令益帶進善寺

領家藏並故口取案附之狀方進善寺利

院山門修造之新城山之間就擇住廳寺

連署狀注參照之處可停山數一且

天台座主無品親王序下文（進美寺文書）

筆 大寺敷地山林

合

一筆寺內

在大坡谷之北邊小西坡道境
西野谷北門有湖石

四至西限多陵寺后北限林放寺南
東限松坂寺西南限金輪院舍

一列院內

在大谷舍金輪院舍北限林放寺南
東限松坂寺西南限金輪院舍

本佛殿佛堂 聖大殿 空印堂

讀法所 拜殿 溫屋

僧房等

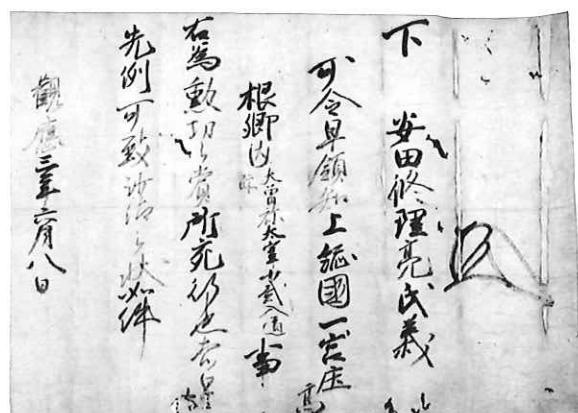
四至東限月臺尾南限支符御櫻道
西限月臺尾北限金輪院舍

南側筆耕社

永治二年八月七日

筆耕社
寺主法師
上人
某
某

大岡寺敷地山林注進状案（大岡寺文書）



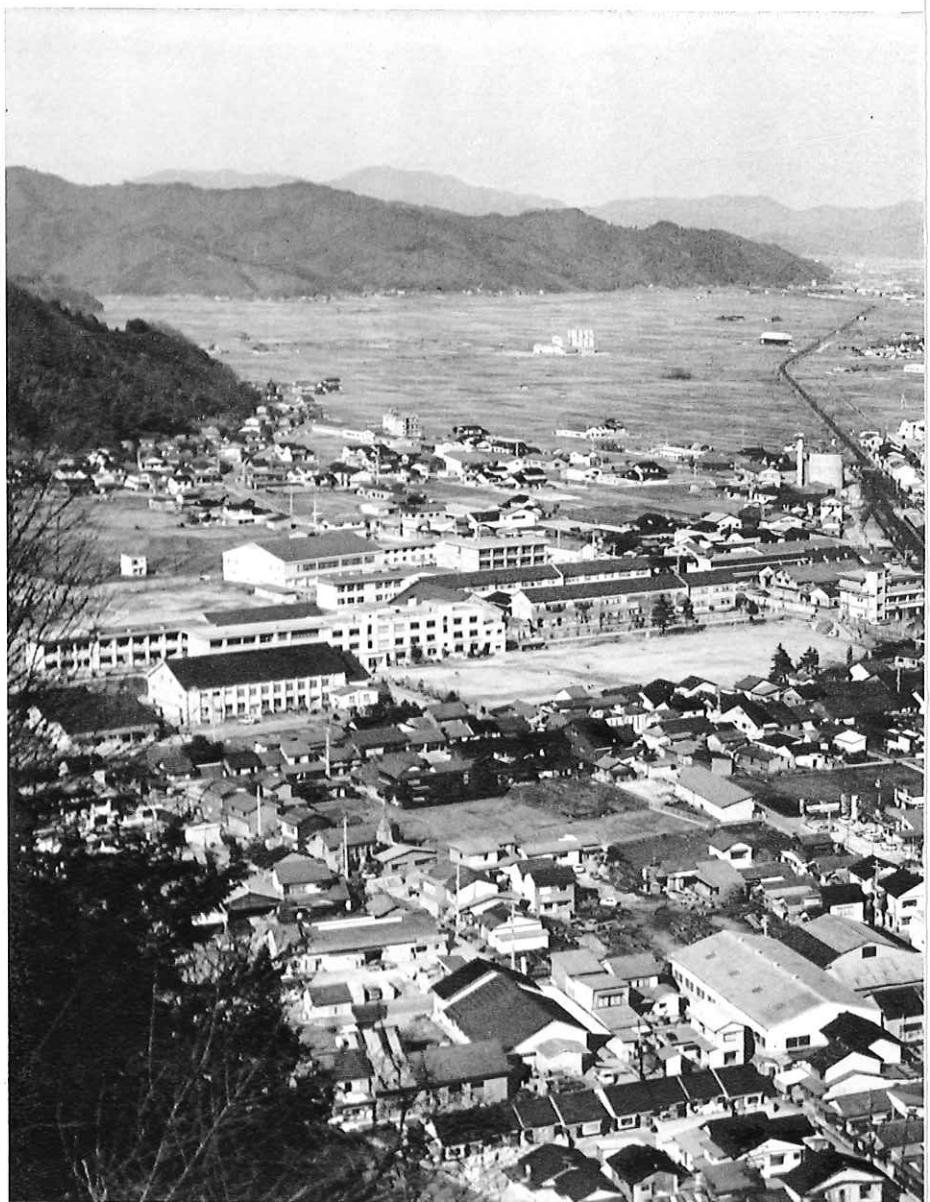
足利尊氏袖判下文（垣谷寛五郎文書）



羽柴秀長鮎漁免状（森垣利助文書）



日高の町なみ 中心街と国府平野展望





旧大岡寺庭園（県指定名勝）

序

日高町は但馬のほぼ中央に位置し、古代、国衙・国分寺の置かれた由緒ある町であります。

昭和三十年三月二十五日、かつての気多郡として地域連帯性の高い国府村・八代村・日高町・三方村・西氣村及び清滝村の六ヶ町村の合併により、新しい日高町が誕生し、その後町発展のため努力を続けてまいりました。

昭和四十六年九月、時代の要請と町民の宿願にこたえ、日高町の歴史を後世に伝えるため、時の森垣壮町長の発議により、議会の深い理解を得て、日高町史編集事業に着手しました。以来町教育委員会主管のもと、町史編集専門委員の献身的なご努力と、更に地方史の権威者である石田松蔵・梅谷光信両先生のうん蓄を傾けられたご

執筆を頂き、ここに格調高い日高町史上巻を発刊する運びとなりました。誠に喜びに堪えません。

本書により、改めて、日高町の古代からの歴史を思い起し、町の置かれた位置づけを新たにし、心豊かな生活の糧として、愛読くださるよう切望いたします。

終りに、編集にあたりご指導並びに資料の提供等数々のご協力を頂いた各位に対し、ここに厚くお礼申し上げます。

昭和五十一年七月

日高町長

長 榎 昇

序によせて

さきに神美村誌の刊行にあたり、古代・中世を石田、近世・現代を梅谷が主として分担して編集してから、早くも二十年の歳月が流れた。今ここに日高町史の出版に際して、ふたたび共に仕事をする機会に恵まれたことは、私共の望外の幸せであり、喜びである。

日高町史は旧氣多郡史ということができる。日高町の歴史を探ることは、但馬史の本流を占める大きな部分に、非常に多くの光を照らすことになるだろう。われわれの試みは、この氣多の地を故地として、腰を据えて農耕に生きて来た祖先たちの姿を、浮彫りに映し出すことであった。

この土地には但馬の国府がおかれ、国分寺もたてられた。しかし、原始・古代・中世の時期の残された資料といふものは、この期間の長さに反比例して極めて限られたものであり、この時期の農耕の生活を描き出すことは至難であった。古代においては、但馬史の流れの中で、はじめて郡司・郷司といふものの性格の解明を取り上げてみたし、中世においては、この動乱期に関東の地から気多の地に移り来った垣屋一族の動向に力を注いだが、いずれもどれだけの光を当て得たといえるだろうか。近世に至つては、豊富な未発表の庶民史料が存在し、多くの方

方の協力を得て、封建農村社会の発展の種々相を明かにすべく努めたが、十分にこなしきれずにほとんど素材の提供にとどまつた憾みを禁じ得ない。

さはあれ、農耕にあけ、農耕にくれた生活と生産は、いつ果つべくも知れないくり返しではあつたが、確実に歴史というものを推進していた。それは明治維新以降における近代・現代史の展開を取扱う本町史下巻において、更に照明を与へらるべき課題でもあるが、上巻における筆の至らざるところが、下巻において大きく補われることを期待したい。

ここに私共に与えられた皆様の御協力に深くお礼申し上げると共に、本書が但馬史の研究の一里塚として役立てられることを心から期待し、更に忌憚のない御教示・御叱正を賜わるようお願いしてやまない。

昭和五十一年七月

石田 松蔵

梅谷光信

凡例

- 一、日高町史は、上巻・下巻・資料編の三巻から成り、この巻は、その上巻である。
- 一、日本年号の下に（）をもつて記した数字は、西暦である。
- 一、本文の記述は、当用漢字・現代かなづかいを用いたが、歴史的用語・人名・地名などは、これによらなかつた。
- 一、接続詞・副詞・代名詞等は、出来るだけかな書きとした。
- 一、難解、誤読のおそれある漢字には、原則として、初出の箇所に、ふりがなをつけた。その後は、必要と思われる場合のみこれをつけた。
- 一、歴史的用語に入らぬものでも、その漢字によらねば、意をつくせないものは、当用漢字以外の漢字を用いてある。
- 一、近世編の資料については、原文のままの文字を用いている。史料の引用にあたっては、原則として、編集者において句読点を付した。又、読み易くするため、読み下し文に改めたものもある。
- 一、数字表記は原則として、千百五十三を、一一五三と記した。但し、年・月・日は、十月十五日のようにし、石高については、三万二千石というように表記した。

一、史料・文献名については、記録・論文などは「」内に、刊行書籍は「」に入れて区別し、掲載した。

一、写真・図表は、上巻を通じて、それぞれ一連番号とした。

一、写真・古文書等の掲載について、人名の敬称は、すべてこれを省略した。

日高町史上卷 目 次

序説

日高町の位置 3

日高町の成立 5

日高町の地形 7

日高町の気象 9

気温・雨・雨日数・風・湿度・雪・日照・地域による気候の差異

日高町の四季 14

春・夏・真夏日・秋・冬

第一部 原始——古代

第一章 日高町の地質構成

第一節 古い時代の地質と地史

概括 中世界白亜系 矢田川層群 新生界第三系
中新統 八鹿累層 豊岡累層 鮮新統 金掘の山玄武岩

第二節 地形の発達と現況

新生界第四系	更新統	河岸段丘	神鍋火山群	神鍋溶岩流	溶岩瘤と風穴	瀧
甌穴	岩津丘	堰止湖	神鍋火山群の活動の時期	神鍋溶岩の成分	現世統	
第二章 考古学から見た日高町						
第一節 日高町の縄文遺跡	53					
考古学とは	先土器時代	縄文式土器時代の区分	日高町の早期縄文遺跡			
前期繩文遺跡	中期繩文文化の遺跡	縄文大海進	後期・晚期縄文の遺跡			
祢布ヶ森の三つの遺跡	サケ・マスと縄文人					
第二節 稲づくりの文化						
弥生文化の波	祢布ヶ森遺跡	瀬戸内の文化と但馬				
第三章 古墳時代の日高						
第一節 気多郡と氣多郷						
文 献 たじま	考古学の所見と文献	氣多という名称	氣多郡と天日槍			
氣多郡の八郷	氣多郡八郷の現地比定	幻の高田郷の郷域	氣多郷は存在していたか			
『律書残篇』の郷数						
第二節 気多郡の郡司						
氣多氏と氣多郡司	氣多國毅川人部広井	氣多軍團	氣多郡司と伝馬	船所と山陰道		

「今郡」という地名

第三節

氣多郡と但馬国司

国司と郡司 陽胡史真身の年譜 真身と大仏铸造 徒五位下という位

国司が開墾した土地

徒五位下という位

第四節

条里化された農地

広井地区と阡陌開拓 条里とは 条・里及び坪付称呼 日高町の条里遺構

条里と氣多郡界 条里と村界 西気地区の条里 清瀧地区の条里

日高地区の条里 国府・八代地区的条里

三方地区的条里

第五節

氣多郡とヤマト政權

氣多郡の名代部 子代部 氣多郡の品部 氣多郡と新羅系渡来者

第六節

国分寺

鹿島神社境内の巨石 二座の法要 但馬国分寺の創建 但馬国分寺の発掘調査

国分僧寺の規模 国分寺、その後 国分尼寺 井戸のある遺跡

第七節

但馬国府

但馬国府は何時ごろできたか 国分寺と国府 但馬国府の移転 無思慮な国府跡論

第一次国府跡と日置郷 第一次国府跡と土居 第一次国府跡と伊智神社

第二次国府跡と八丁路 高生郷と給田 但馬国府は果して移転したか 国府と道路

第四章 平安時代の日高

第一節 焼けた正倉

正倉炎上 正税無実

神火の正体

郡司と郷

高田郷

氣多郷

大岡山と進美寺
郷司佃と西県郡司

正倉炎上 正税無実

神火の正体

郡司と郷

高田郷

氣多郷

第二節 大岡山と進美寺

神の山、大岡山 式内社 気多郡の四つの大社 気多神社

郡分寺と郷寺

進美寺の創建

觀音寺・円提寺

大岡神と大岡寺

但馬國司と八幡別宮との斗争

第三節 源頼光

満仲さんの碑

但馬守源頼光

頼光と藤原朝経

富裕な国司

莊園と御厨

第二部 中世

第五章 武家政権成立期の日高

第一節 寿永の内乱

寺院知行国

進美寺と比叡山 進美寺と寿永の内乱

日置郷の平家方人

越生右馬允

進美寺の五輪宝塔供養

第二節 雅成親王

承久の変

觀音寺・円提寺と太田行願

新井荘と宇多々家守

進美寺と鳥羽院

進美寺油畠

進美寺と岩出野 蓮台寺・吉祥寺・石和田保

建屋紙工保

進美寺の聖憲法師

但馬守護太田昌明進美寺領を違乱す

太田昌明の言い分

忠清と忠行

進美寺領の地積 進美寺と異国降伏祈禱

進美寺の悪僧

三方郷と比叡山

比曾寺と松尾延朗

樂前藤内兵衛人道

樂前荘と中分地

高田郷と高田忠員	狭沼郷と八木一族	八代庄と八代右近入道善阿	国御家人
沼田頼西と氣多郷	中世の農業		
第三節 雅成親王伝説			
雅成親王 ばば燒松の話	山崎三郎右衛門と薬師仏	雅成親王と薬師仏	
雅成伝説と若宮信仰	大岡山の薬師如来		
第四節 国衙と守護所			
守護所 留守所			
第六章 南北朝の内乱期の日高			
第一節 進美寺城			
新井莊と建武の新政府	進美寺と南北朝の争乱	進美寺城争奪戦	
大将野上下莊と国分寺	山名時氏	水尾山城の戦	得久名
第二節 垣屋氏			大岡山四周の有力農民
垣屋の登場	『垣屋系図』について	安田氏義	垣屋重教
安田千松丸とその所領			氣多郡安養寺
第七章 垣屋七代			
第一節 垣屋と明徳の乱			
垣屋時忠と明徳の乱	隆国寺	垣屋隆國	垣屋満成
第二節 垣屋の悲劇			垣屋潤統

応仁の乱と垣屋 戸牧山の合戦と垣屋 垣屋の内政的側面 隆国の三子、相ついで死す

垣屋、再び播磨守護代となる 垣屋の悲劇

第三節 垣屋の僭上……………

垣屋・山名政豊と争う 山名俊豊と垣屋

二つの垣屋の政治路線 垣屋光成・根拠地の強化を計る

垣屋と山名政豊の対立

垣屋と將軍義尹

第八章 戰国の動乱と垣屋……………

第一節 因幡戦争……………

日光院の寺田とその寄進者 垣屋とその所領

觀音寺村

因幡戦争

第二節 垣屋と毛利……………

信長の雲、伯、因合力作戦と垣屋 出石城と垣屋

芸但和睦と垣屋

毛利山陰道直上作戦と垣屋 垣屋光成と八木豊信

野田合戦

吉川元春、竹野へ進出す

水生城の戦 紹吉に降った垣屋 垣屋因幡巨濃城主となる

垣屋恒総の死

第三節 日高町域の山城……………

山上に眠る遺構 城にまつわる話の虚と実

下津屋新三郎

宵田の町場

358

351 351

343

第三部 近世……………

第九章 幕藩体制の成立……………

第一節 新しい但馬の支配者と氣多郡……………

397

397

395

織豊体制から幕藩体制へ　出石藩・豊岡藩　生野代官所・久美浜代官所
旗本小出・旗本杉原・その他の旗本

第二節　氣多郡の村々の所領沿革……………421

古料、中料、新料と享保上知、明和上知、天保上知

改易の分類

村々の所領沿革一覧

第三節　近世村落の行政……………449

近世村落のはじまり　分知による分村

村々の組合　地方知行の村

村方役人の給料

武家奉公人　法度五人組帳

第十章　検地の実施と貢租の誅求……………481

第一節　氣多郡における検地の実施……………481

近世初期の検地　補充訂正の検地

第二節　村高と貢租率……………481

氣多郡全体の村別石高　出石領の村々の石高と貢租率

伊府村の貢租率と銀納率　年貢割付状と年貢皆済目録

複雑な貢租納入方法……………481

第三節　所領ごとに異なる貢租納入方法　生野代官所領の場合　豊岡御藏米値段の変遷資料

元文五年生野領氣多郡十五ヶ村貢租銀納願　文化六年生野代官所領村々の貢租減免願

久美浜代官所領の貢租納入方法　享保上知豊岡新料久美浜領十四ヶ村年貢納入方法報告書

出石藩領の貢租納入方法　旗本杉原領の貢租納入方法

第十一章 近世的農業の展開

第一節 自然的条件と農業技術

治水と堤防

土居村上土手の治水問題

井堰と用水路

庄境村新左衛門前水戸口の水論

535

名色村男山の清水の水論

男のかせぎと女のかせぎ

馬の飼育

牛の飼育

535

農作物と肥料と農事暦

第二節 農民層の分解

農民階層構成の変動

新田開発の奨励

年季質地による土地集積

田畠永代売買証文の例

高率米納小作料の実態

寄生地主制の成立

親方子方の分布状態

第十二章 山と川の利用

第一節 円山川のめぐみ

円山川漁業のあらまし

羽柴小一郎の鮎漁免状

川株の権利の売買譲渡

村々における漁業税

鮎とりの漁法のいろいろ

鮭をとる漁法

名産の魚

第二節 円山川の水運と不便な陸上交通

江戸時代の交通ルート

円山川の水運と西廻海運

円山川高瀬舟の運行

船で運ばれた物と人

川船の分布状況

第三節 山林利用の型態

山林利用のあらまし

入会山のいろいろ

少数持主の百姓林

第四節 山論の発生

643

635

616

603 603

559

xvi

山論の頻発と問題点 山論裁許状のいろいろ

第五節 生類憐み令と狩獵統制

銅犬の登録届 生類あわれみの通達 鉄砲の取締り

681

第十三章 市場経済の発達

第一節 出石 豊岡 江原 肖田の市場

691

出石・豊岡城下町の形成 城下町を補う在郷の市場 特権を与えられた江原村
宵田村の定期市 肖田市場の運営規程

第二節 阿瀬金銀山の繁栄

701

氣多郡の鉱山 段金山の変遷 広大な阿瀬金銀山の区域 阿瀬銀山の採鉱方法
阿瀬銀山の鉱石生産高 阿瀬銀山師の生野代官宛歎願書記事

第三節 貨幣制度と金融機関

722

不統一な江戸時代の貨幣制度 但馬における貨幣經濟の浸透と紙幣の流通
通貨の流通に関する通達のいろいろ 分銅改めの実施 幕末の財政金融事情の悪化
御上納金銀御掛座規定書

第十四章 商品生産流通の拡大

747

第一節 酒造業の発達

747

但馬における酒造業 わが町の酒造業者の成長 酒造業者の分布状態
酒造株の譲渡証文 幕府の酒造取締り 酒造業者の果した役割

第二節 養蚕業の展開	桑役銀納と真綿運上	上垣伊兵衛守国	765					
近世前期の養蚕	近世中期の養蚕							
蚕飼仕法申渡書	久美浜代官所の生糸売買規定	幕末の生糸検査	機械製糸への準備段階					
第三節 近世的職業のいろいろ								
氣多郡内の工と商	塩壳、博労	牛馬の医者	大工、紺屋、鍛冶屋、紙すき ほか					
第十五章 苦しい農民の生活								
第一節 深刻な人口問題								
家数と人口の推移	庄迫された農村人口							
第二節 火事と農民								
火事と村法	頃垣村の火事届	庄境村の大火と百姓家屋						
第三節 医療と疫病								
低かった医療水準	疫病の流行のありさま							
第四節 天保の大飢饉								
悲惨な過去帳	飢饉と騒然たる物情							
第十六章 文化のありさま								
第一節 行事と娛樂								
江戸時代の農村文化と庶民の楽しみ	手辺歌舞伎	久斗文楽	そうだろ節					
嫁入の衣服手道具進物目録								
817	817	810	806	800	793	793	787	787

第二節 宗教と教育

江戸時代の宗教や教育の特色

切支丹不受不施悲田宗三派禁制通達 遊行上人の御通行 民間信仰と石仏巡礼

青谿書院に学んだ人々 孝行者の表彰

第三節 寺院と神社と人物

隆国寺の建築と岸派の襖絵 旧大岡寺庭園 進美寺の餽口

長楽寺の茶湯釜 觀音寺の仁王門 大円寺開山悦叔禅師の語録 氣多神社の建築

田尻嘉兵衛義番 上田未生斎広甫 長沢蓼州 赤木勝之 千葉郁太郎

第十七章 農民一揆

第一節 元禄九年出石藩領札場打ちこわし

前代未聞の出来事 『但州発元記』の記事

田井氏家事要録の記事 札場と掛屋

第二節 宝永七年出石藩領氣多郡惣百姓愁訴

第三節 天明四年久美浜代官所領村々強訴

第四節 寛政四年西ノ下谷不穏

第五節 嘉永七年久美浜代官所領殿村貢租減免願

第六節 文久三年生野の変と氣多郡

第七節 慶應二年西の下谷騒動

伊府村庄彦左衛門の見聞記

一件てん末手続書 一味徒党の処罰

反幕府の機運の高まり

第八節 慶応三年久美浜代官所領四郡村々貢租减免願願書.....

893

第九節 慶応三年生野代官所領四郡村々石代歎願書.....

897

第十節 慶応四年倒幕の通達文書のいろいろ.....

903

第十八章 資 料.....

905

第一節 村明細帳のいろいろ.....

906

第二節 村々人別石高反別集計一覽表.....

908

第三節 村法のいろいろ.....

909

あとがき.....

910

写真・図・表一覧

1065 1053 983 906 905 903 897 893

○本巻背文字、扉文字は前町長森垣壯氏の筆による。

○本書の見返しに使用した文書は、正倉院保存文書「正税帳」の一
文を宮内庁書陵部の許可を得て掲載した。天平九年の収支決算帳
で、国序のあつた奈良時代の日高町の歴史を紐解く貴重な文書で
ある。

○巻頭写真「但馬倉印」は、奈良時代における但馬国の正倉の印。
鋳銅印、印面方形で昭和十三年重要文化財に指定される。

序

說

序　説

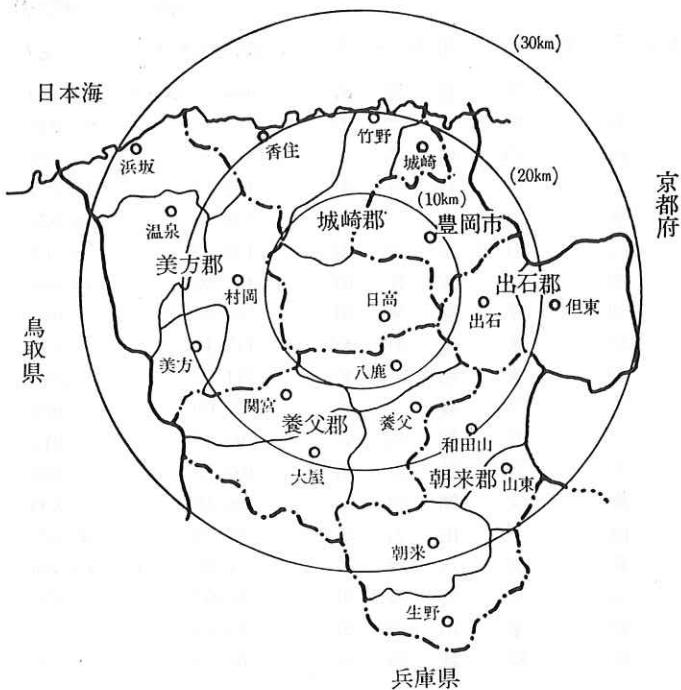


図1　日高町を中心とした等距離線

日高町の位置

試みに、清滝地区の十戸か石井あたりに定点を設けて、半径十キロメートル、二十キロメートル、三十キロメートルの同心円を描いてみよう。どうだろう。半径十キロメートルの円周の中に、日高町がすっぽりと包摶されてしまうし、半径三十キロメートルの円圈内には、これまた全但馬が、綺麗に収まってしまう。単純に地理的な位置づけをするなら、わたしたちが住んでいる日高の町は、このように、但馬の中心的位置を占めて

表1 但馬地域における市町村別面積と人口

(昭和50年国勢調査)

順位	旧郡名	市町村名	面積(平方千米)	人口(人)
1	七城	美崎	164.94	8,429
2	出氣	石	162.11	46,211
3	養	多父	161.81	7,022
4	二美	方	151.30	19,394
5	朝	含	140.55	6,572
6	朝	来	138.15	8,964
7	養	来	137.02	15,606
8	二美	父	129.35	8,044
9	養	方	112.13	6,659
10	二美	含	111.72	15,698
11	朝	来	107.00	9,969
12	朝	来	103.85	12,915
13	養	父	103.63	6,466
14	二美	坂	96.48	5,350
15	養	野	89.79	10,926
16	出	和	77.98	13,030
17	養	養	67.63	3,536
18	七朝	浜	48.73	7,362
19	城	竹	31.14	5,670

いる町だといえよう。東は出石郡出石町、西は美方郡村岡町、南は養父郡八鹿町、北は城崎郡竹野町・香住町に接し、東西約十八、六キロメートル、南北約十七、六キロメートル、面積五百十一、三平方キロメートルに及んでいる。広さの点では、但馬一市十八町の中で、第四位であり、但馬の中では大きい方だ。しかし町域に含まれている地域は、古代から明治の中頃まで続いた行政区画でいえば、ほぼ氣多郡の全域にわたっている。この点、朝來・養父の二郡がそれぞれ四町に、出石・七美・二方・美含の四郡がそれぞれ二カ町に、そして城崎郡が一市一町に分れているのと対象的だ。というわけは、これらの七郡の地域は、地形・

序 説

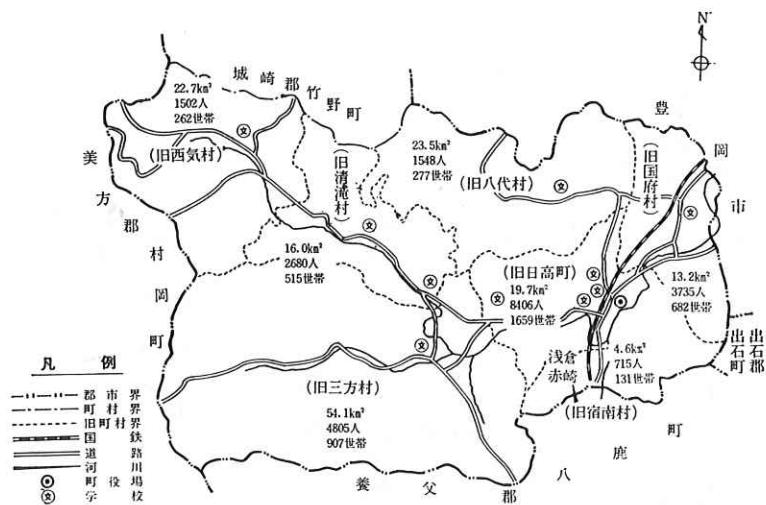


図2 昭和30年合併時の旧町村別区画と人口、面積

地理・人情・風俗・文化・経済などが、それなりに内部に於て、それぞれ複雑な要素をもつてゐたから、このように二分割したり、四分割したりする必要があったのに対して、わが日高町は、かつての気多郡一郡を、殆んどそのままの姿で受けついでいたのは、それだけに、いろいろな構成要素の面において、もともとから、大きな違いがない地域であったからだ。つまり、町民のだれもが、昔も、今も、地域連帶意識に燃え、この地に、住むことに、大きな誇を感じさせるような、心豊かな生活がくりひろげられている地域だったといえよう。

日高町の成立

ところで、この一郡一町という、わがふるさと日高が、出来上ったのは、そう古い話ではな



図3 気多郡域と日高町域

い。その直接の機縁となつたのは、昭和二十八年（一九五三）に、町村合併促進法が施行されたためだ。この法律は、町村の規模を拡大し、その適正化を計つて、地方自治を強化し、併せて現在の複雑な内政の処理を合理化、簡素化しようとのねらいをもつたものだった。この要請を受けて、養父郡宿南村の内赤崎・浅倉が日高町と昭和三十年二月に分村合併し、続いて城崎郡国府村・八代村・日高町・三方村・西気村・清瀧村の一町五村の合併が成立したのが、昭和三十年（一九五五）三月のことだつた。こうして新しい日高町が出来上つてみると、その町域は、古い行政制度の氣多郡の郡域と、ほぼ重なり合つていた。これは偶然だったといえは、それまでだが、何とい

い。その直接の機縁となつたのは、昭和二十八年（一九五三）に、町村合併促進法が施行されたためだ。この法律は、町村の規模を拡大し、その適正化を計つて、地方自治を強化し、併せて現在の複雑な内政の処理を合理化、簡素化しようとのねらいをもつたものだった。この要請を受けて、養父郡宿南村の内赤崎・浅倉が日高町と昭和三十年二月に分村合併し、続いて城崎郡国府村・八代村・日高町・三方村・西気村・清瀧村の一町五村の合併が成立したのが、昭和三十年（一九五五）三月のことだつた。こうして新しい日高町が出来上つてみると、その町域は、古い行政制度の氣多郡の郡域と、ほぼ重なり合つていた。これは偶然

序　説

表2　日高町土地利用区分

(昭和50年)

	面 積	筆 数	比 率
田	13,488,512 m ²	26,225件	8.9%
畠	7,034,927	23,590	4.7
宅 地	2,719,735	13,277	1.8
山 林	53,282,780	14,847	35.2
原 野	635,441	3,347	0.4
雑種地	968,123	3,409	0.6
その他の	73,208,811	15,270	48.4
計	151,298,329	99,965	100

つても、新しく出来上った日高町は、もともと、円山川中流部に、歴史的に形成されていた、政治・経済・文化の共通圏を背景にして生まれた町であつたわけだ。

加えて、この地域には、かつて但馬の国府が設置されていた。国府は、地方行政の執行機関だ。かくして新日高町は、地理的に但馬の中心地域というばかりでなく、政治・文化・経済の各方面に於て、但馬の中心であつたという歴史を、かつては永らく持ち伝えていた地域でもある。日高町の町域のいずれの地点でもよい、一皮はぐって見れば、必ず、但馬の歴史を物語る遺物、痕跡にぶち当たるもの、その為めだ。日高町は但馬の地下の正倉院でもあり、但馬の歴史の流れの、主流地帯だった。

日高町の地形

日高町は、実に山地の部分が多い。町域の大部分を占める山地は、中国山地の東端部で、播但山地と呼び慣わされている地域が、漸次東へ向って低平化していく部分に当たる。従つて町域を流れる川は、三川山（八八七メートル）、蘇武岳（一、〇七五メートル）、妙見山（一、一四二メートル）をつらねる山地を分水嶺として、東へ流れている。その流れも、千メートル級に近い分水嶺から一挙に、三百メー

トル位の丘陵台地へと奔り、更に北流する円山川と、二十メートル位の低平野部で合流しようとするのであるから、激流は岩を噛み瀬をつくり、いたる所に渓谷を形成している。

町域の東よりの平野部を貫流しているのが円山川だ。蛇行の跡を著るしく残している。それだけに、平野部の沖積化は形成途上だともいえよう。

注1、日高町の拡がり

東端—東經一三四度四九分一秒	北緯三五度二九分七秒	西端—東經一三四度三七分二秒	北緯三五度三〇分五秒	南端—東經一三四度四四分四秒	北緯三五度二五分一秒	北端—東經一三四度三八分六秒	北緯三五度三一分九秒	東西間の距離 南北間の距離	一八・六キロメートル 一七・六キロメートル
----------------	------------	----------------	------------	----------------	------------	----------------	------------	------------------	--------------------------

3、日高町の人口、世帯数（昭和五十年国勢調査）	男		女		計	世帯数
	旧三方村	五四・一	旧清瀧村	一六・〇	二、六八〇	一、五〇二
	旧西氣村	二二・七	旧赤崎浅倉	四・六	七一五	一五三・四
	計	九、二一〇	一〇、一八四	一九、三九四	一一三、四一〇	四、六四九

4、日高町域及びその周辺における山岳の標高（単位
メートル）

旧日高町	一九・七平方キロ	八、四二五人
旧国府村	一三・二	三、七三五
旧八代村	二三・五	一、五四八

蘇武山	一、〇七五
三川山	八八七
大岡山	六六四
大机山	五〇〇

2、町村合併時の旧町村別面積と人口（町村合併史に依る）

()

序　説

日高町は裏日本の山陰気候区に属し、寒候期の北西季節風による雨雪が多いのがその特徴である。暖候期

日高町の気象

5、日高町域内における主要個所の標高 (単位 メートル)	6、日高町域内の主な河川延長(単位 メートル)
宵田城山 (妙見山) (氷の山) (鉢伏山) (来日岳) (滝川山)	八代小学校 静修小学校 三方小学校 清瀧小学校 西気小学校 上石戸 稻葉 金谷
一、一五六 一、一四二 一、三三二 一、二二一 一、〇三九 五六七	二〇五・五 七四・〇 三四五・八 六・八 一〇二・〇 一〇四・〇
町役場 江原駅 府中小学校 日高小学校	八代川 稻葉川 阿瀬川 円山川 (内、町内分)
二〇・一 二一・七 七・九 二三・八	八、五一 二〇、四六四 八、四五五 六九、三〇九 九、一一〇
	(総延長)

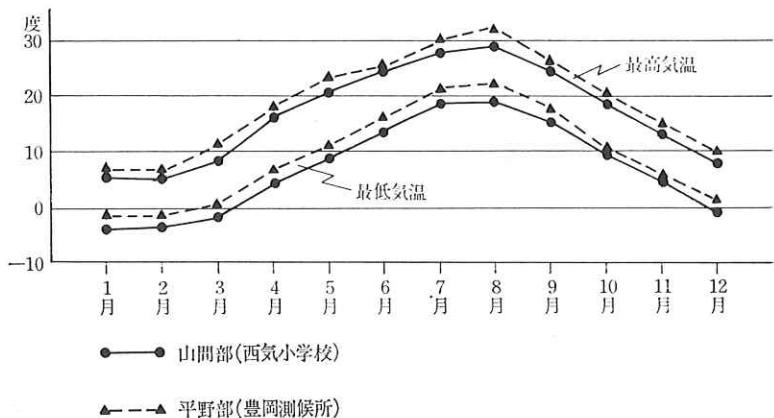


図4 最高・最低気温月別変化

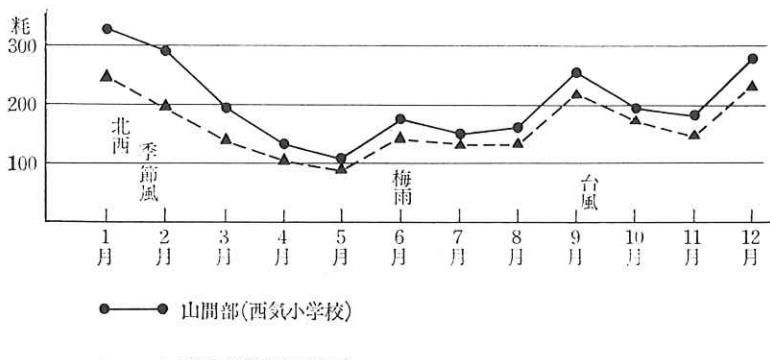


図5 降水量月別変化

は表日本の気候と
大きな違いはない。
一月が最も低く、
三・四度、八月が
最も高く、二六・
四度となつてい
る。過去の資料に
よると、日高町の
山間部と平野部で
は二・三度の違い
があり、最高、最
低気温の年変化は
図4のようになつ

序　説

表3　日高町の季節

季節	小季節	初　日	終　日	天　候　の　特　徴
春	春	3月13日	4月4日	移動性高気圧が去来するようになり、気温はずんずん高くなるが、ときどき気圧配置は西高東低型にもどり、季節風が吹いて寒い日がある。
	晩春	4月5日	4月29日	冬の季節風は吹き止み、移動性高気圧が去来し急に天気がよくなる。天気は3日くらいつづくとくずれる傾向がある。
	初夏	4月30日	6月13日	天気の周期性が顕著でなくなり、ときには帯状の移動性高気圧におおわれて天気のよい日がつづいて夏のような暑さを感じる日もある。
夏	梅雨	6月14日	7月13日	梅雨前線が日本付近に停滞して長雨が降る。 前線が北上するとき大雨が降りやすい。
	盛夏	7月14日	9月2日	日本付近は太平洋高気圧の圈内に入り暑いよい天気がつづくが、雷が発生しやすい。
秋	秋霖	9月3日	9月21日	秋雨前線が日本付近に停滞し、悪天の日が多く、台風が襲来する。
	秋	9月22日	10月17日	移動性高気圧が去来するようになり、秋晴れの日が多くなるが気温はずんずん低くなる。
	晩秋	10月18日	11月15日	時々西高東低の気圧配置になって、北西の季節風が吹くようになり、しぐれやすくなる。
冬	初冬	11月16日	12月16日	俄に冬らしくなり、高い山では積雪、平野部でも初雪がふる。天気のよい朝は霜がおりる。
	冬	12月17日	3月12日	冬型の気圧配置で雪が降る日が多い。晴れても1日つづかないで、そのあと強い季節風の吹き出しがある。

ている。気温により季節を分類すれば、春は三月十三日に始まり、九十三日間、夏は六月十四日に始まり、八十一日間、秋は九月三日に始まり、七十四日間、冬は十一月十六日から百十七日間となつておる、冬が最も長く、秋が最も短い。(表3 参照)

雨

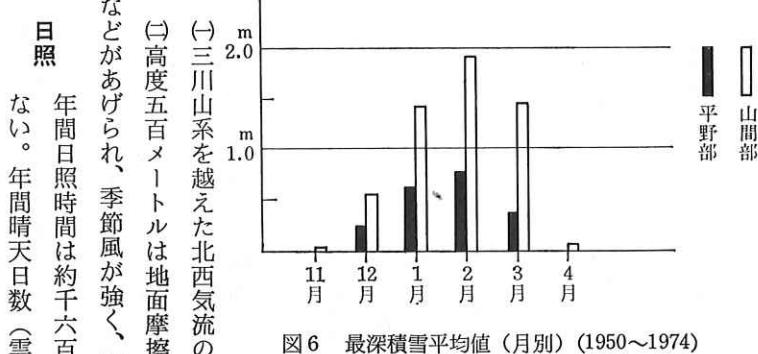
雨量は平野部で年間二千ミリ強で山間部はこれより約五百ミリ多い。(図5 参照)

冬の季節風による他、梅雨期、台風期にも可成りの雨量がある。この豊富な雨量を利用して、阿瀬・石井・岩中発電所がもうけられ、電力の供給に大きな役割を果たしている。

一日一ミリ以上は年間百七十日で一年の約なればを占め、山間部(西氣小学校の資料)ではこれより二十五日も多くなつておる、その原因は夏から初冬にかけて、雷やしぐれが平野部より多くなつてゐるためである。昔から「弁当を忘れても、傘忘れるな」という諺が残つてゐるが、但馬地方の陰うつな天候を、よくあらわしてゐる。

日高町は日本海沿岸から約二十キロメートルの距離にあるため、平野部では円山川流域に沿つて吹く海陸風の影響をうけてゐる。夜から朝にかけては陸風(南よりの風)、日中から夕方にかけては海風(北よりの風)が卓越する。

山間部やこれにつづく高原地域では山谷風のため、谷筋にそつて夜から朝にかけては山風(西よりの風)日中から夕方にかけては谷風(東よりの風)が卓越する。風向の交代時刻は季節、天気によつて左右される。又十メートル以上の強風は、冬の北西季節風が最も多く、日本海を通過する低気圧によつてもたらされる南よりの春の暴風がこれに次いでいる。



湿度 年間を通じて八十パーセント前後と高い。このため夏はむし暑く、秋は霧の多い原因となっている。しかし四月から五月はじめにかけて、気温の上昇にともない二十パーセントを割り、異常乾燥による火災が発生しやすい時期もある。

雪 日高町に降る雪は平野部と山間部では量的に大きな差があり、最深積雪の平均は山間部で二メートル弱、平野部で〇・七メートル前後となっている。(図6)降雪の機構は地形・高度によって異なり、平野部の大雪は、季節風が弱まり局地的な前線による不安定性の降雪であり、山間部の大雪は強い北西の季節風が山の斜面を滑昇して断熱冷却する事によって降る雪で、昼夜を問わず降りつづくため可成りの積雪量になる。関西で有数のスキー場である神鍋山の高度が約五百メートルに近いにもかかわらず積雪の多い理由として、

(一)三川山系を越えた北西気流の吹き溜りに位置すること。

(二)高度五百メートルは地面摩擦による風速の減衰が少なくなる高さで雪雲が山腹に直接つき当たること。

などがあげられ、季節風が強く、吹走継続時間が長い程、積雪が多くなる。人々はこれを山雪と呼んでいる。年間日照時間は約千六百時間で日照率三十六パーセントになっており表日本より約十パーセント少ない。年間晴天日数(雲量〇—七)は百四十六日でほぼ日照率に見合っている。

地域による気候の相違

日高町では海拔十メートル～二百メートルの間に人家が点在する平野部と、二百メートル以上の山間部に分れ、気候に多少の違いがある。平野部は豊岡盆地の一部となつており山間部は中国山地に連なる。神鍋山・蘇武岳・妙見山等とこれにつづく高原地域で、春の気候の遅れや冬の訪れは平野部に比して十日～十五日それぞれ遅速がある。

日高町の四季

春

三月のはじめは平均気温は四度、朝方の最低気温は零度以下でまだ雪の降る日もあるが日中の気温が十度近くまであがり、梅やタンポポが咲きはじめる。三月中旬になると、春日和となって陽光の暖かさを次第に増すようになる。この頃日本海を発達した低気圧がとおり「春一番」と呼ばれる強い南の暴風で急に暖かくなったり、そのあとで急に真冬の寒さに逆戻りしたりする。平野部では積雪が消え、ひばりが鳴き始める。

四月上旬には平均気温が十度近くまで昇り、日中の最高気温も二十度になり桜が咲きはじめる。平野部ではこの頃終霜になるが山間部では五月中旬頃に、晩霜のおりる事もある。四月中旬に桑の芽が出はじめ、平野部では、つつじが咲きはじめるが山間部では約半月遅れる。下旬には蛙や蛇を見るようになる。

五月はじめには平均気温十五度以上になり湿度も低く、雨量も少なくなり、最も快適なシーズンとなる。月末頃には日中の最高気温も三十度に達する日が出はじめ、ホタルが見られるようになる。



写真1 進美寺の雲海

夏

六月は新緑の季節で、円山川で「あゆ」の解禁となる。六月中旬に梅雨に入り七月上旬まで続く。最近は梅雨明け頃「集中豪雨」に見舞われ被害が発生する事が多くなった。七月のはじめになると「せみ」が鳴きはじめ、学校などでは「プール開き」となる。一年中で最も平均気温が高くなるのは七月二十八、二十九日で二十七・五度に達する。八月は年によって、気候も違い、雷雨の多い年、台風が接近する年、雨らしい雨がなくて旱ばつになる年もある。最近における但馬で最も長い旱ばつの記録は、昭和二十年七月二十七日から八月二十四日まで二十九日間の記録がある。

真夏日

(日最高気温三十度以上の日数で熱帯日とも呼ばれる)

昭和四十八年七月二十五日から九月二日まで五十六日間も続き暑い夏として全国的な話題となつた。これは平野部が盆地になつてゐるためで、山間部では空氣の流れも早いので体感的にはかなり涼しく感じる。

秋

九月に入れば平均気温も二十度前後までさがり、台風シーズンになる。災害をもたらす台風は、九月中下旬に西日本を襲う事が多い。日高町に大きな災害を与えた室戸台風・伊勢湾台風は九月下旬に当地を通過している。九月の但馬は秋霖の季節で、秋雨前線が四国南岸に停滞して、雨が何日もふり続く事もある。

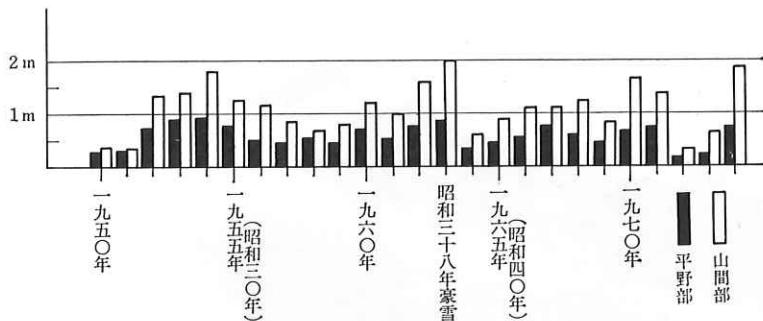


図7 最深積雪の経年変化 (1950~1974)

る。十月は又霧の季節もある。日高町の平野部では十月中旬に十七日間も霧が発生する。この霧は放射霧と呼ばれ、霧の成因として次の事があげられている。

(1) 地形が霧発生に適している。盆地であるため風が弱く夜間の放射冷却も三~五度と大きい。

(2) 空気中の水蒸気量が多いこと。円山川があり水田が多いため、日射による蒸発で水蒸気が蓄積され易いこと。夜間河川水温と気温差が大きい事(温度差四度~六度)

又、発生状況は日没と共に山地の方が盆地より冷却が早いため垂直的には山風が、水平的には陸風が発生するため山地傾斜面で早く高湿度となり、山側の山麓でまず霧が発生し、霧は山腹よりはい下って漸次盆地に及ぶようになる。進美寺・大岡山から眺められる早朝の雲海(霧高度百五十メートル~二百メートル)は円山川にそって盛上り、朝方下流に向つて流れ出る様は素晴らしい景観である。

冬 十二月に入ると平均気温も五度前後にさがる。蘇武岳山頂に雪が降るのは、早い年は十一月下旬になるが、平野部では十二月のはじめに初雪が降る。累年平均で雪日数は五十日、積雪日数は五十八日と

序　説

表4 最近5ヵ年の日高町の気温（豊岡測候所調）（単位度）

月 年度	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	平均
昭和45	1.6	3.7	3.0	11.0	18.0	20.0	25.8	26.9	23.9	16.2	9.9	4.5	13.7
46	3.2	2.9	5.5	11.5	16.8	21.4	24.2	26.1	21.3	14.7	10.0	5.4	13.7
47	5.6	4.4	7.3	12.4	16.9	21.1	25.4	25.9	21.2	15.7	10.2	5.7	14.3
48	4.6	4.4	5.7	13.9	16.8	20.0	26.9	27.4	21.4	15.8	9.1	2.8	14.1
49	2.1	2.3	5.6	13.1	17.8	20.7	24.2	25.7	20.8	15.5	9.1	5.5	13.5
平 均	3.4	3.5	5.4	12.4	17.3	20.6	25.7	26.4	21.7	15.6	9.7	4.8	13.9

表5 最近5ヵ年の日高町の雨量（豊岡測候所調）（単位粍）

月 年度	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	合 計
昭和45	332.0	138.0	239.0	105.5	58.0	298.5	116.5	174.0	104.5	114.5	276.0	218.5	2175.0
46	163.5	195.0	137.0	109.0	98.0	130.5	289.5	167.0	327.0	123.0	98.0	164.0	1979.5
47	241.0	231.5	138.5	132.0	75.5	170.5	434.0	125.0	341.5	120.5	137.5	263.5	2411.9
48	222.0	140.0	175.0	98.5	95.0	151.5	71.0	98.0	149.5	155.5	202.0	265.0	1823.0
49	247.5	216.5	191.5	178.5	52.5	82.5	246.0	86.5	182.0	110.5	127.0	193.5	1914.5
平 均	241	184	176	125	75	167	227	130	221	125	168	221	2060

表6 最近5ヵ年の降雪量（平野部）（単位粍）

月 年度	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	最深積雪
昭和 45	66	39	36	—	—	—	—	—	—	27	23	66	
46	34	70	11	—	—	—	—	—	—	7	4	70	
47	3	13	6	—	—	—	—	—	—	—	13	13	
48	10	18	10	—	—	—	—	—	—	3	39	39	
49	44	70	66	—	—	—	—	—	—	—	3	70	
最深 (S 45)	66	70	66	—	—	—	—	—	—	27	39	70	
										(S 45)	(S 48)	(S 46, 49)	

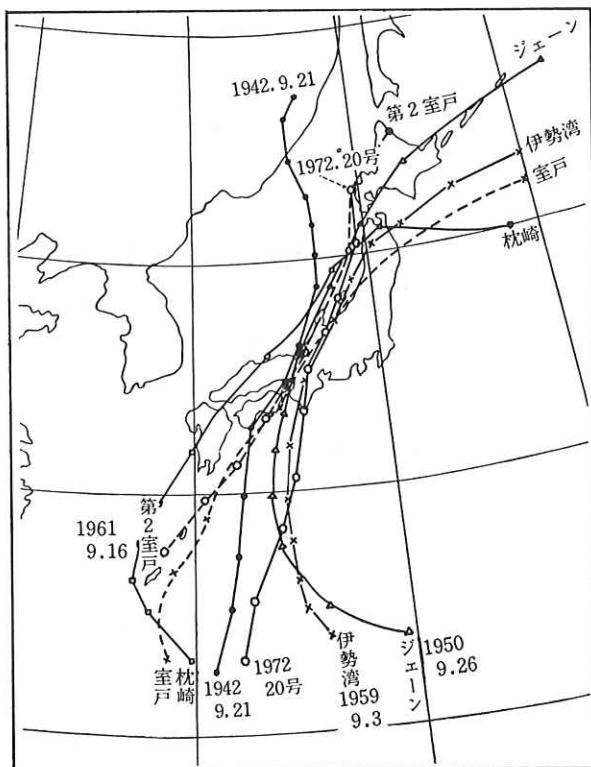
註、山間部の統計不詳

表7 天 气 日 数

快 晴 日 数	16日
曇 天 日 数	219日
不 照 日 数	60日
雨 日 数	171日
雪 日 数	50日
霧 日 数	118日
雷 電 日 数	15日

快 晴 日 数：雲量(0~2)
曇 天 日 数：雲量(8~10)
不 照 日 数：日照のなかった日数
雨 日 数：1日1.0ミリ以上の日数
雪・霧・雷電日数：それぞれの現象の生じた日数

図8 日高町に災害を与えた台風経路図



なつております、但馬の冬は二ヶ月は雪に埋もれているが山間部では三ヶ月間は雪の中である。近年は特に雪が少なく、神鍋スキー場では雪不足に泣いた年もある。最近二十五年間の最深積雪の変化は図6のようになつております、大局的に見ると、山間部を中心に十年毎に大雪の降る傾向がある。日高町の平野部で一メートルを越した記録が最近の二十五年間にはないが、北半球では寒冷化に向つている事などから、冬の積雪も増加する事が予測される。昭和九年・昭和十一年の大雪は日高町平野部でも一・五メートルを越し、家屋や電柱倒壊等の雪害があつた。冬は霜や結氷の季節でもある。平野部でも寒波の吹き出しの早い年は、十一月初旬に霜や結氷を見る事があるが、通常は十二月はじめである。冬は風の季節でもあり、寒冷な北西の風が山岳から日高町平野部に吹きおりてくる。風がやや西に偏よつて、妙見山から吹きおりてくる風を「妙見おろし」と称して日高町の人々は寒さの代名詞にしている。

